こんな授業をしたい

ある都道府県の6月30日（金）付け地方紙に「車いす搭乗拒否」という社説が掲載されていた。

どのような出来事か、皆さんご存じのことと思うので、ここでは書かないが、飛行場の状況を予想すると、多くの方々が納得いかない出来事が起こっていたのではなかろうか。

車いすを使用していた男性が、タラップを登る姿を思うと、その男性自身のこととともに、助けてあげられる大人が何人もいたにも関わらず、何もできない（してはいけない）状況は、いかななものかと思ってしまう。

二度とこのような状況が起こらない社会を形成するために、大人と共に子供に考えさせたいと思う。

しかし、この事例を考えると、いろいろ配慮が必要であろう。

短絡的に航空会社が悪いとか、タラップ周辺を担当していた職員の責任転嫁をしない方向で考えさせなくてはならない。なぜなら、その職員は、航空会社の業務委託を受け、航空会社の規定に基づき介添えの大人たちの行為を止めたのである。

来年度から、小学校で道徳が教科化される。

道徳の目標としては、自立した人間として他者と共によりよく生きるために、人間尊重の精神や豊かな心を持つことは大切なことである。

検定教科書の教材と共に、「公共交通機関の経営者（社長さん）として、お客さんが安全に気持ちよく利用できるようにどのような配慮が必要だろうか」というような「考え、議論する授業」はできないだろうか。

とはいうものの、教科化されたことで、授業に対し、様々な指導が行われることが予想される。社会的な事案を教材の一部に用いることは十分気を付けなくてはならない。

しかし、今回の教科化の背景を忘れてはいけない。

教育界全体で、道徳教育が十分に機能しないこととともに、いじめ等の社会的な問題が生じてきて、「とにかくしっかり道徳をしてください」ということで、教科化になった経緯がある。

一方で、教科化を創り上げた文部科学省や協力者たちは、道徳教育の反省点を踏まえ「画一的な授業にならなうように」「教師の押しつけにならないように」と多様で柔軟な授業を求めている。

道徳教育の研究を行っている先生ほど、お手本となる指導案をつくり画一化しているともいっていた。

（でも、画一的な方法を示さないと取り組んでくれない先生がいたことも見逃せない。）

とにかく、先生方に「教科化になったことで道徳が一層わかりにくく、授業がやりにくい」「つまらない」と思わせたくない。

身近な事案も活用し、子供が真に考え議論する道徳を目指したいものである。